

群馬フィールドトリップ

若林学

The University of Tokyo

フィールドトリップ初日には富岡製糸場を訪れた。日本の近代化を象徴するような場所だ。案内員の方のお話によると、当時の女工の給料は2円~3円程度、当時の水準でかなりの高給である。労働時間は1日7時間45分と、現代日本で標準の8時間より短い。加えて宿舍や医療、教育が無償で提供されていたようで、かなりの高待遇ぶりと言えるだろう。日本の工場の範としての役割は十分に果たしていたようだ。

しかし、こうした「模範」に従って日本の近代化が進んだとは言えない。富岡の環境が日本近代化の明るい部分だとすれば、日本の近代化にはそれに比せないほど多くの暗い部分がある。

2日目にはこうした近代化の闇を環境問題という切り口から覗くことになった。私達はまず田中正造記念館を訪れ次に渡良瀬遊水池を訪れた。田中正造記念館のように鉱毒による凄惨な公害被害、政府による谷中村住民の棄民を記憶する試みがある一方で、大部分の日本人は事件を忘れている。渡良瀬遊水池には新たに、ラムサール条約登録地やデートスポットとしての意味付けがされており、谷中村を沈めて生まれた場所だという認識は乏しいのだ。

渡良瀬遊水池がデートスポットとして人気になっている理由の一つに、遊水池がハート型になっているというものがある。渡瀬湧水池は元々円形で作る予定だったが、墓地だけは沈めないでくれという谷中村住民の懇願で、北部の一部が残りハート型になったらしい。私達は土砂降りの中その墓地（延命院共同墓地）を訪れた。この墓地の存在を知った上で、遊水池のハート型を「かわいい」などと言えるだろうか。私はそんな気持ちにはなれなかった。

近代化の闇の記憶が風化することを憂慮する、そんな念を抱いたフィールドトリップだった。

写真は延命院共同墓地

